

第 17 回大阪大学野田村サテライトセミナー 「野田村社協の 3 年 ― 災害ボランティアセンターと見守り活動―」

2014 年 7 月 11 日、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムのもと開設された「大阪大学野田村サテライト」にて、「第 17 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回は、震災から 3 年にわたる野田村社会福祉協議会の活動、中でも、災害ボランティアセンターの振り返りと、現在進行中の見守り活動に焦点を絞って、お話しいただくというテーマでセミナーを行いました。講師には、野田村社会福祉協議会主査の小谷地要治さん、同総括生活支援相談員の明内清一さんをお迎えし、京都大学准教授でチーム北リアス共同代表でもある永田素彦先生に聞き手となっていただきました。

今回のセミナーには、18 名が参加してくださいました。また、今回も、遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパスと大阪大学豊中キャンパスをつなぎ、三地点同時中継でセミナーを行いました。

まず、永田先生が、震災以前の社協の活動、社協の被害状況を小谷地さんに確認され、震災直後のボランティアの受け付け窓口、災害ボランティアセンターの経緯へと話が進められました。小谷地さんは、災害ボラセンを開設するのは初めての経験で戸惑いはあったけれども、結果的に過不足のない人数のボランティアに來村してもらい、大いに助けになったと振り返りつつ、あまりに思いの強い個人ボランティアにどのように活動してもらえばよいのか戸惑うこともあったと報告されました。



3 人の発表者（左から永田准教授、小谷地要治さん、明内清一さん）

続いて、小谷地さんから、見守り活動について、生活支援相談員を雇用しての活動経緯が述べられた後、現在の見守り活動の状況が資料を使って細かく報告されました。永田先生から現在の見守り活動の問題点や、震災から 3 年間の変化などについて、明内さんに質問されると、明内さんからは、数々の事例をもとに、3 年経って仮設住宅に住みにくくなってきた人、高台移転が決まり落ち着きを取り戻した人、高台移転も自力再建も見通しが立たず困り果てている人など、多様な現実のあることが示されました。訪問時の相談内容と

して、日常生活や健康問題が多いことも報告されました。会場から「どういう問題が最も対応が困難か」という質問があり、家族のトラブルに関する相談は、対応できないことが多く難しいとの応答がありました。

最後に、永田先生から今後の見守り活動について尋ねられますと、小谷地さん、明内さんから、それぞれに展望を話されました。



参加者のみなさん

お二人とも、傾聴を中心とした見守りを継続しつつも、仮設住宅を離れてからのコミュニティづくりを視野に入れた活動を展開していくと述べられました。その際、高台団地は、地区としてのまとまりが見られるようになると予想されるが、自力再建でコミュニティから離れた場所に移転された場合や、逆に、既存のコミュニティの中へ移転された場合に、地域での相互の見守り活動をどのように進めていくかということが課題とされました。また、社会福祉協議会とチーム北リアスのボランティアとの間で 2 年以上にわたり開催してきている地域見守り勉強会は、先行事例の学習や特定の課題（例えば、引越しのお手伝い）への対応など様々な面で今後とも有効であるとの認識が示されました。

第 17 回大阪大学野田村サテライトセミナーは、引き続き、未来共生イノベーター博士課程プログラムの夏の授業「コミュニティワーク」に関する住民説明会へと移行しました。終了後の懇親会でも見守り活動に関する活発な議論に花が咲きました。次回セミナーは、8 月 11 日に「のだむラジヲ」、Light Up Nippon と連携して開催する予定です。